

平成 27 年度共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名	和文：太陽ニュートリノにおける昼夜効果の精密観測 英文：Precise measurement of Day/Night effect for B8 solar neutrinos
研究代表者	宮城教育大学・教授・福田 善之
参加研究者	東京大学 宇宙線研究所・教授・中畑 雅行
研究成果概要	2015年に梶田先生とともにノーベル物理学賞を受賞したA. McDonald教授が率いたSNO実験による太陽ニュートリノ振動の確立は、2001年のスーパーカミオカンデによる結果も大きな寄与を与えていた。その太陽ニュートリノ振動のグローバル解がLMA領域にあることは、その後にカムランド実験による原子炉ニュートリノ観測結果や最新の観測結果から同様にLMA解を支持していることから、ほぼ確定したと思われる。しかし、混合角の値には実験的な誤差があり、真の解を具体的に特定することが急務となってきた。本研究は、太陽ニュートリノを精密に観測し続けているスーパーカミオカンデのデータを解析し、昼夜効果の精密な観測を行うことによりLMA解に対して独立に制限を与えてニュートリノ振動解を特定するとともに、太陽ニュートリノ振動の確実な証拠を得ることを目的としている。 これまでに、スーパーカミオカンデでは、SK-IからSK-IVにおけるB8太陽ニュートリノ観測を行い、昼夜の太陽ニュートリノの流量差の観測を試みた。その際、太陽ニュートリノの反応の時間的な違いを観測するため、スーパーカミオカンデ検出器の観測事象の角度依存性による系統誤差の評価を正確に行わなければいけない。また、バックグラウンド事象の発生場所依存性や方向の特性も理解する必要がある。ニュートリノ振動のLMA解における昼夜効果は、ニュートリノフラックスを数%レベルの精密さで流量の違いを観測するため、スーパーカミオカンデ検出器のエネルギー決定精度や系統誤差の評価は極めて重要である。更に、現在スーパーカミオカンデが行っている低エネルギー閾値によるデータ収集に合わせて、低エネルギー領域における昼夜効果の測定も重要になってくる。そこで、定期的に行われるLINAC（電子発生装置）によるスーパーカミオカンデ検出器のエネルギー較正や、DT中性子発生器により発生するN16の崩壊電子による場所依存性や方向依存性などの較正を行い、これらの系統誤差の精密な評価を行ってきた。

本年度では、2008年10月6日から2015年4月30日までの2140.9日のSK-IVのデータを用いて、3.5MeVから19.5MeVのエネルギー領域で太陽ニュートリノの昼夜効果の解析を行った。昼の時間は1040.77日で夜の時間は1100.13日になった。SLEトリガーでデータ収集しているため、5.0MeV以上のデータでは22.5ktonの有効体積であるが、4.5-5.0MeVでは $Z > -8\text{m}$ の16.45kton、3.5-4.5MeVでは検出器上部の8.85ktonの有効体積を使用している。今回測定した昼夜時間における各々のB8ニュートリノの流量は、Day : $(2.286 \pm 0.026 - 0.026) \times 10^6 / \text{cm}^2 / \text{s}$ 、Night : $(2.347 \pm 0.026 - 0.025) \times 10^6 / \text{cm}^2 / \text{s}$ を得ており、非対称性は $A_{\text{DN}} = -0.026 \pm 0.014$ を得た(図1)。これは、昨年度の1667日のデータから得られた非対称性 $A_{\text{DN}} = -0.049 \pm 0.017$ よりも小さい値であるが、夜のニュートリノの流量が約3%多いことを示している。しかし、統計的有意性は 1.9σ であり、決定的な昼夜効果の発見には至っていない。また、エネルギー分布の違いに対しても、有意に違いが観測されていない(図2)。更に、ニュートリノ流量の天頂角分布によるニュートリノ振動の解析も行ったが、これも誤差の範囲内で有意な差は見られていない(図3)。今後、更に統計量を増やし、系統誤差を低減させた解析を行う計画である。

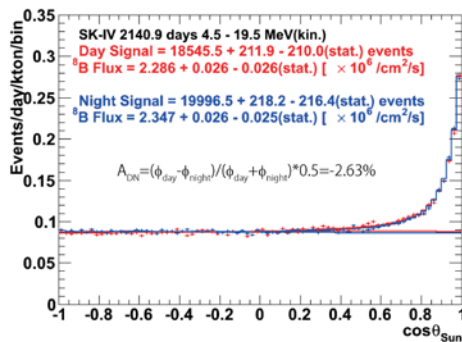


図1 昼夜時間の太陽方向分布とB8ニュートリノの流量

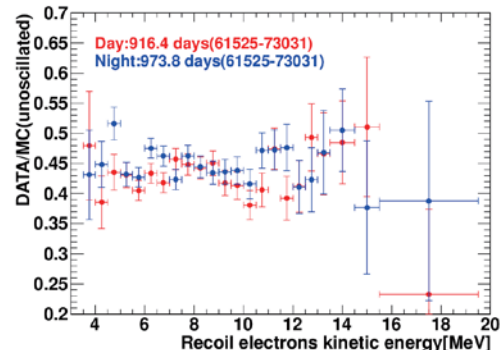


図2 昼夜時間によるB8ニュートリノ事象のエネルギー分布

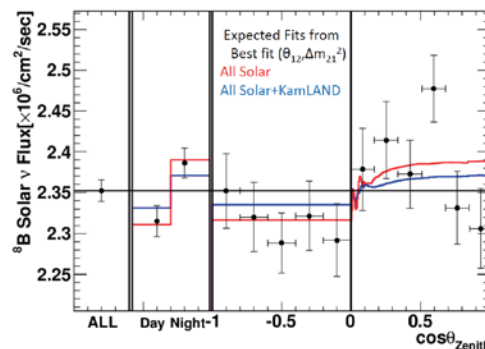


図3 ニュートリノ流量の天頂角分布